
「海の生き物を守る会」メールマガジン No.44

2009.8.1 (土)

うみひろも

Association for Protection of Marine Communities (AMCo)

Homepage : <http://www7b.biglobe.ne.jp/~hiromuk/index.html>

「今日の海の生き物」 オヨギイソギンチャク *Boloceroides mcmurrichi*

オヨギイソギンチャクは花虫綱オヨギイソギンチャク科に属するイソギンチャクの仲間。



他のイソギンチャクと異なり、触手を動かして泳ぐことができる。しかし、目的を持って泳ぐということではなく、浮遊するという程度。写真のようにアマモの葉の上に付着していることが多い。触ると簡単に触手が外れてばらばらになることがあるが、再生能力は高い。一本の触手から個体の再生も可能である。大きさは 1-2cm 程度。刺胞を持っているが、人間には敏感な人には感じる程度。

(岡山県児島湾にて
向井 宏撮影)

目次 「今月の海の生き物」オヨギソギンチャク

1. 海の生き物とその生息環境に関するニュース
2. 現在の活動と予定
3. 海の生き物に関する運動・行事・他の団体の情報
4. 海の生き物とその環境に関する出版物の紹介
5. 連載エッセイ（10）

「自分さがしの自然観察—私たちはなぜ生きている」横濱康継

6. 事務局便り
7. 編集後記
8. 「うみひろも」と「海の生き物を守る会」について

1. 海の生き物とその生息環境に関するニュース

【全国】

●自然公園法改正案が成立

5月27日に、国立公園などの管理方法を定める自然公園法の改正案が成立した。この改正は、これまでの自然公園法が風景の保護に重点を置いたものであったのに対して、生態系の保全と野生生物の保護という目的を国立公園などの設置目的に加えることによって、生物多様性保全へも貢献できる法律にするために行われた。

瀬戸内海のように国立公園に指定されていながら、大規模な埋め立てが行われて、自然海岸が失われたような過去の自然公園法の轍をふむことがないような、国立公園や国定公園の管理がなされることを望みたい。今も瀬戸内海国立公園の中で、埋め立てやダムの建設など自然公園法などないがごとき政策が進められている。環境相はこれらの事業に意見を言う権利を持っている。なんとかして欲しい。

【関東】

●沖合5kmまでを国立公園に 小笠原(訂正)

先号の記事で、「環境省は、国立公園法の改正を目指しているが、衆議院の解散で改正案を国会に提出できなかった。」と書きましたが、環境省野生生物課中山直樹係長から、5月27日に国会で成立したとご指摘いただきました。訂正してお詫びいたします。中山係長にはご指摘をお礼申し上げます。ゆえに、先号の記述は以下のように書き換えます。

環境省は、自然公園法の改正を目指していたが、5月27日に成立、施行された。それに従って小笠原諸島の国立公園を世界遺産登録と来年の生物多様性条約締約国会議(COP10)に向けて拡大する方針を明らかにした。拡大するのは、海では、ザトウクジラなどの海洋動

物の生息地として沖合 5 km までを国立公園に拡大し、サンゴ礁を 7ヶ所海中公園地区に指定するというもの。

これまで国立公園の中で海は沿岸から 1 km を一律に指定し、しかし実質上は海の管理はほとんど行わなかったのに対して、新しい自然公園法改正案では、陸上と同じように特別保護区域を海にも設定できるようにし、陸と連続した干潟や海岸をも含むことができるようにした。

【北陸】

●高岡・五十辺で大型海牛の化石

富山県高岡市五十辺の石灰岩採掘場で大型海牛（かいぎゅう）類の骨の化石が富山県古生物研究会会員によって発見された。富山県で海牛類の化石が発見されたのは初めてのこと。化石が見つかったのは約 300 万年前の鮮新世地層。日本海でも海牛類が生息していたことが分かる貴重な資料である。日本海側で海牛類の化石が見つかったのは、北海道のタキガワカイギュウ以来 2 例目で、きわめて珍しい。上あごの歯が退化していることから、タキガワカイギュウよりも進化したタイプと考えられている。骨の化石は富山市八尾町の八尾化石資料館「海韻館」で展示され一般公開されている。

見つかった海牛類の化石は、細かく砕けた状態で発掘されたが、同会員によって一部復元された。その結果から、全長約 10m と推定される。海牛類の化石はジュゴンの仲間、海藻を主食としていたと推定されているヒドロダマリス属。

【近畿】

●白浜塔島周辺のウミトサカ類が壊滅状態

和歌山県田辺市付近で約 400mm という 7 月上旬から起こった集中豪雨の影響が、海の中にも顕在化している。田辺湾西側の白浜塔島周辺で、八方サンゴのウミトサカ類が淡水の流れ込みによって壊滅状態にあることが、京都大学瀬戸臨海実験所の久保田信准教授の調査で明らかになった。ウミトサカ類は固い外骨格をもたない「ソフトコーラル」と呼ばれる八方サンゴの仲間。塔島付近では、オオトゲトサカやアカトゲトサカ、キロトゲトサカ、キバナトサカなどが知られている。

久保田准教授は、7 月 12～19 日に素潜りや目視観察で塔島付近を調査したが、最干潮時の水深 1m よりも浅いところのウミトサカ類は、淡水の影響でほとんどすべて死亡し、溶けて無くなっていったという。それ以深では、深くなるほど生き残りの率は高い。同じ八方サンゴのイボヤギもほとんど白骨化しているという。久保田准教授は赴任以来 17 年間、個々を調査してきたが、こんなことは初めてと話しているが、7 月下旬に再び襲った集中豪雨の影響はどうだったのだろうか。

●ハマボウ群生地に遊歩道整備

和歌山県白浜町の富田川や高瀬川の河口にあるアオイ科の海浜植物ハマボウの群生地に、住民らが板を渡して遊歩道を造っている。これまでに 60m を整備した。ハマボウの群落内を荒らさないで花を愛でることができるようにしたもの。4 年計画で完成の予定である。5 年ほど前に地元の人たちがハマボウの群落が広がっていることを発見し、「花がきれいなので身近で鑑賞したい」という希望があり、農村の景観保全を目的とした農水省の補助事業で遊歩道を造ることを申請し、補助を受けながら住民自身の手で遊歩道の整備と群落の手入れを行っている。

ハマボウは別名「ハマツバキ」とも呼ばれ、黄色の鮮やかな大型の花を咲かせる。国内では神奈川県三浦半島以南の海岸に生育する熱帯系の落葉高木。河口などの塩沼地などにまとまった群落をつくることが多いが、近年は護岸整備などによってほとんどの群落が消滅してしまった。高瀬川河口では 8 月上旬ころまで花が見られる。

●田辺湾で南方系大型種センニンフグを釣り上げ

和歌山県の田辺湾で南方系魚類のセンニンフグが釣り人によって釣り上げられ、話題を呼んでいる。田辺湾の水深 10m 付近で釣り上げられてもので、京都大学瀬戸臨海実験所の久保田信准教授によると、インド太平洋の熱帯域沖合に生息するフグの仲間で、若魚らしい。成熟すると体長 1.3m にもなるが、釣り上げられた魚は全長 38cm。これまで白浜水族館でも飼育されたことのないやや珍しい種類の魚という。体型が細長く、頭から尾にかけて銀色の帯があるのが特徴である。

【中四国】

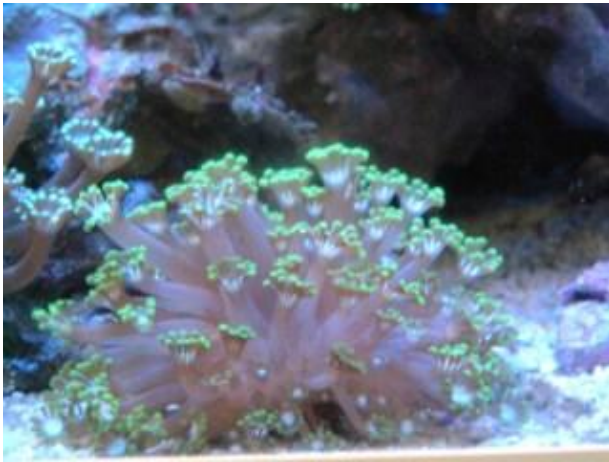
●笠岡でカブトガニの自然産卵 7年ぶり確認

岡山県笠岡市立カブトガニ博物館は、笠岡市の神島水道でカブトガニの卵を 7 年ぶりに発見したと発表した。同博物館の館員が見つけたもので、環境が改善され個体数が増えているためではないかと今後の自然繁殖に期待した。

同博物館では、毎年産卵期の 7~8 月に繁殖地内の砂浜を掘って、卵を探しているが、最近では 2002 年に数カ所で卵を確認して以降、産卵が見つかっていなかった。カブトガニの卵は直径 3~4mm の白い球形をしており、今回は砂浜の砂の中に 300 個くらい生み付けられているのを発見した。

笠岡市はかつて笠岡湾がカブトガニの生息地として有名で天然記念物にも指定されていたが、笠岡湾全面の埋め立て計画で指定を解除され、神島水道などの沖側に繁殖地を指定変更されてかろうじて生き残っている。今回自然産卵が 7 年ぶりに発見されたのが、環境の改善によるかどうかは不明。埋め立て以前の環境を取り戻さない限り、笠岡市のカブトガニは今後とも絶滅寸前の状態が続いていくだろう。

●ニホンアワサンゴの大群落を確認 周防大島沖



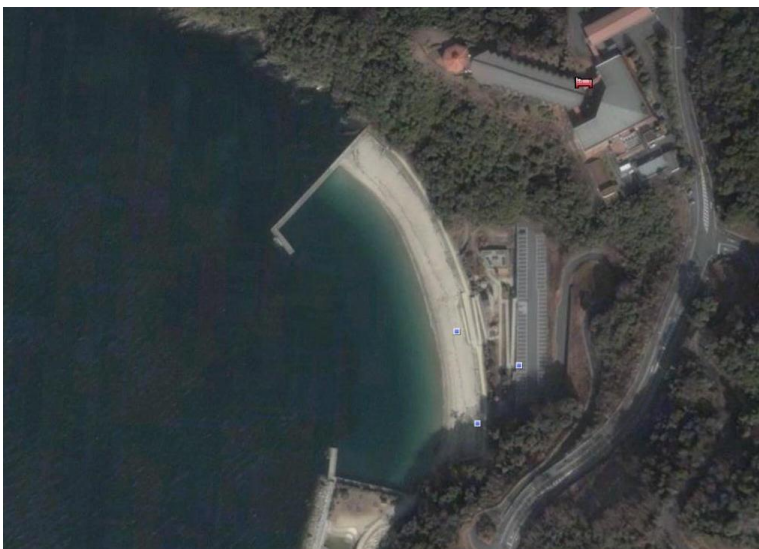
山口県周防大島沖で、ニホンアワサンゴの大群落が発見された。ニホンアワサンゴは、石サンゴの中では比較的北の方にも生息する種類として知られており、千



葉県館山付近を北限としている。瀬戸内海は浅くて冬の水温が11℃よりも下がるためニホンアワサンゴは、生息できないと言われてきた。しかし、近年周防大島周辺でニホンアワサンゴが生息していることがダイバーによって発見されていた。今回、周防大島町のNPO法人「自然と釣りのネットワーク」や海中景観研究所などにより潜水調査が行われ、ニホンアワサンゴの大群落が生育していることが発見された。群生地は水深3mから13mで、群落の大きさは20mにも達するという。群落の規模から言うと館山の群落を超える日本一ではないかと、同ネットワークの藤本さんは話している。

同ネットワークと海中景観研究所の新井所長らは、ニホンアワサンゴの大群落の観察会を7月25日に行った。観察会では、水温計の設置や群落の大きさの測定などを行い、その後講演会を同町の「生涯学習のむら」で行った。

●下松・はなぐり海水浴場 砂浜崩落で立ち入り禁止



7月21日以来の集中豪雨により、山口県では各地で被害が発生しているが、下松市では笠戸島のはなぐり海水浴場を閉鎖し、遊泳および立ち入りを禁止した。大雨により砂浜の砂が流出し、砂浜が数カ所で崩落しているため。今月の豪雨で砂の流出で砂浜に1m以上の段差が生じているところもあ

り、転落事故も起こりうる判断したものだ。

この砂浜海岸は、1986年につくられた山口県で初めての人工海岸であり、砂を人工的に入れ、両側をコンクリート壁で固めたきわめて反自然的な海岸（写真参照）であり、大雨や台風などにより砂の消失は当然起こってきている。人工海岸では、須磨海岸での陥没死亡事故もあり、当然起こりうる人為的な災害と言えるだろう。

●萩市の橋本川にアザラシ？

山口県萩市を流れる橋本川で、アザラシと思われる動物が現れた。橋本川の河口付近にある河添河川公園の護岸にあがって休息を取っている姿が住民に発見された。ときどき川に入ったりしており、ロコミで多くの住民が見物に訪れている。見物した住民によれば、体を白っぽく、体長は1mを少し超える程度。写真から判断すると、タテゴトアザラシと思われるが、小型なので子供の可能性もある。どのような経路で山口県に現れたか、不明。最近、各地でアザラシ類が出現して話題になっているが、共通した原因があるのだろうか。一部の専門家が主張しているように、海洋汚染などによって位置感覚などが不全になり、本来の生息場所以外に現れていると言うことが事実なら、きわめて憂慮すべきことかもしれない。

●徳島県竹ヶ島で「自然体験ツアー」

徳島県海陽町と高知県東洋町の間を結ぶ阿佐東線（阿佐海岸鉄道尾）沿線の自然を楽しむ「自然体験ツアー」が海陽町穴喰浦の竹ヶ島で行われた。阿佐海岸鉄道と自治体などでつくる阿佐東線連絡協議会が主催。自然体験ツアーでは、海中観光船を使って海中の景観や珊瑚、魚などを観察したり、貝殻を使ったアートに挑戦したり、親子10人が参加して楽しんだ。

【九州】

●諫早干拓反対漁協が消えていく 農水省の報復か

諫早湾干拓事業をめぐって反対闘争を続けてきた漁業組合が、政府（農水省）の水産業協同組合法を盾に取った統廃合の促進で、解散命令を受けたり、統合を要求されたりして、事実上の消滅が続いている。農水省は全国規模で漁協の統廃合を進めている中で起こっていることで、干拓事業とは関係ないとしているが、農水省が各県知事を通じてこれらの漁協に解散命令を出している。早米ヶ浦漁業組合、大牟田漁協など福岡県の三つの漁協が解散命令を受けた。解散の理由は、水産業協同組合法だ。同法によると組合員が20人以上でなければならないとする。早米ヶ浦漁協は組合員が19人だった。諫早干拓でタイラギやアサリなどの漁業が成り立たなくなったため、廃業する組合員が増えたためという。しかし、これまで県の漁業管理課などは長年監査もしないで20人以下の漁協の存続を放置してきたのに、今頃になって急に法を持ち出して解散を迫った。しかも管理課では組合員

を個別に狙い撃ちし、電話で漁業を辞めたいという言質をとり、それを録音して解散命令の裁判に提出するなど、露骨な組合つぶしを行ってきた。その背景には、組合長が熱心な干拓反対運動をしてきたことがあるという。解散を命令された三つの漁協はどこも同じである。早米ヶ浦漁協の所属する大牟田には、ほかにいくつかの組合員が 20 人を下回る組合があるが、それらの組合には解散命令が出されていない。あきらかに政治的な行政が行われているようだ。ある関係者はこう述べた。「組合長は諫早の海上デモの先頭に立っていた。その姿はテレビに映っていました。あれだけ目立てばやられます」。

いらない農地をつくるために有明海の心臓と呼ばれる諫早湾をメ切り、その影響で漁業ができなくなって辞めていく漁師を理由に、反対していた組合を潰す。農水省の政策が「ノ一業政策」と言われるゆえんである。

【沖縄】

●辺野のアセスで 「ジュゴン隠し」？

アメリカ軍普天間飛行場の代替え施設辺野古基地建設に関する環境影響評価（アセス）準備書が防衛局から提出されて、アセス審議会の審議が始まっているが、アセスの中で辺野古沖にはジュゴンはいないという結論を出しており、そのために基地の建設はジュゴンに影響を与えないとしている。ところが、環境省の報告書には 2005 年 3 月 7 日、午前 10 時から 7 時間 11 分にわたり、宜野座沖から「辺野古沖をゆっくりと北上し、長島・平島あたりで U ターンして南下」するジュゴン成獣 1 頭を確認したと明記している。ジュゴン保護キャンペーンセンターなどの環境保護団体は、準備書がこのジュゴンの報告を意図的に改ざんして辺野古にはジュゴンは 1999 年以降は確認されていないという結論を導き出しているとして、防衛局に抗議した。

沖縄県のアセス審議会でも委員から厳しい指摘が続いており、とくにアセス方法書に書かれていない基地内の工事などがあらたに準備書に加わるなどの「後出しじゃんけん」と言われるような準備書の出し方が違法ではないかという指摘があり、アセス法の専門家を呼んで意見を聞くことを決めた。8 月いっぱい審査が行われ、9 月には答申がなされる予定である。

2. 現在の活動と予定

●まだ目標の 4 分の 1 です

砂浜海岸生物調査をいっしょにやりませんか

海の生き物を守る会では、昨年から NPO 法人 OWS と共同で全国の砂浜海岸生物調査を実施してきました。引き続き今年も砂浜海岸生物調査を行っています。日本の砂浜を生き物

のために取り戻そうと計画された調査です。調査は誰にでもできる方法で計画されていますので、少しでも多くの方が、多くの海岸でこの調査に参加していただけるようお願いいたします。ご協力いただける方には、方法と調査報告用紙をメールでお送りいたします。当会のホームページ <http://www7b.biglobe.ne.jp/~hiromuk/index.html> にも掲載しています。

これまでに会員や非会員のみなさまから寄せられた調査票は38枚、全国23ヶ所の砂浜で調査が行われました。全国の砂浜調査にするには、まだまだ多くの海岸で調査が必要です。最低各県で2-3ヶ所の砂浜を調査し、全国で100ヶ所以上を目指しています。ぜひともみなさまのご協力をお願いします。

3. 海の生き物に関する運動・行事・他の団体の情報

【関東】

●OWS 5人の写真展 「未来に残したい海」

息をのむような美しい海、水中で繰り広げられる生きものたちのドラマ、生命をはぐくむ豊かな海、そして最近海で気づくことの多い異変など、5人の気鋭の自然写真家・海洋写真家が「未来に残したい海」をテーマに映像のコラボレーションとして表現します。

12回目を数える今回の写真展は、たくさん子どもたちが訪れる「東京ガス 環境エネルギー館」で開催します。 ⇒ <http://www.ows-npo.org/activity/photoex/index.html>

開催期間 2009年8月1日～30日 9:30～17:00 (入館は16:30まで) 月曜休館

開催場所 東京ガス株式会社 環境エネルギー館 4F 展示室

〒230-0045 神奈川県横浜市鶴見区末広町 1-7-7

TEL:045-505-5700 <http://wondership.com/>

アクセス JR 鶴見駅東口または京浜急行鶴見駅よりバス 15分

入場料 無料 協賛 オリンパス株式会社 株式会社モビーディック

●水中スケッチ画家 近藤ちひろ個展&トーク

個展「海の島の虹とシマ唄」入場無料

日時：2009年8月17日(月)～23日(日) 月～土：11:00～19:00 日：11:00～17:00

場所：東京銀座 AC ギャラリー (銀座 5-5-9 阿部ビル 4F 03-3573-3676)

個展「楽園の神さまたちの唄」入場無料

日時：9月19日(土)～27日(日) 10:00～19:00

トーク&ライブ (前売り 1000円、当日 1500円)

日時：9月19日(土) 18:00～

場所：経王寺本堂 (東京都新宿区原町 1-14) <http://www.kyooouji.gr.jp>

問い合わせ先：03-3341-1314

●OWS 第 11 回 海辺の自然教室 参加者募集

「伊豆大島ネイチャーツアー ～火山島の自然と生きもの～」

ナチュラリスト・ガイド:小川修作 (エコツアーショップ「シーサウンド」代表)

人類が誕生する遙か昔の太古から長い噴火の歴史とともに形成されてきた伊豆大島。今なお数十年ごとに噴火を続ける火山島には独特な生態系と、この地ならではの生きものたちが生息しています。このツアーでは火山活動が作り出した特殊な環境とそこに棲む生きものたちを訪ねて、OWS ネイチャーガイドがご案内します。

開催日 2009年9月12日(土)～13日(日) 1泊2日

開催場所 伊豆大島

集合場所 大島高速船到着港(岡田港または元町港)

プログラム概要(2日間)

三原山溶岩台地(裏砂漠)観察、島海岸&砂の浜海岸の生き物観察、トウシキ海岸での生き物観察(スノーケリング)、クラフト など

対象者 小学3年生以上、スノーケリング経験者

参加費(予価) メンバー:16,000円/一般:18,000円 ※宿泊費・交通費は別途

募集人数 8名(最少催行人数4名)

お問い合わせ・お申し込み OWS事務局まで、E-mailまたはお電話にてご連絡下さい。
(TEL:03-5960-3545)

※詳細はOWSホームページで。大島までの交通・宿については、お問い合わせください。

【中部】

●水中スケッチ画家 近藤ちひろ個展&トーク

個展「海の島の虹とシマ唄」入場無料

日時:2009年7月11日(土)～8月6日(木)

場所:ウエスティン名古屋キャッスルホテル(名古屋市西区樋の口町3-19 052-521-2121)

【中四国】

●岡山瀬戸内市ハクセンシオマネキ群生観察会

日時:8月1日(土) 集合 13:00 岡山ブルーライン駐車場

●「上関原発を考えるつどい—現地報告と交流」

日時:8月5日(水)

場所:原水禁世界大会広島大会の「ひろば」

この日は祝島へのフィールドワークもあります

①参加者としてのご来場を是非、お待ちしております。

②当日、会場準備や運営などお手伝い下さる方があれば嬉しいです。

問い合わせ 長島の自然を守る会 代表 高島美登里 midori.t@crocus.ocn.ne.jp

747-0063 山口県防府市下右田 387-14 Tel&FAX 0835(23)1891. 携帯 090(8995)8799

●上関原発埋立て認定取消請求「自然の権利」訴訟初公判

日時：8月19日(水) 13:30～

場所：山口地裁

公判終了後、報告会

場所：中市コミュニテイホール (083-925-1617 に移動して開催)

長島の自然を守る会 代表 高島美登里 midori.t@crocus.ocn.ne.jp

747-0063 山口県防府市下右田 387-14 Tel&FAX 0835(23)1891. 携帯 090(8995)8799

●親と子の「生物探検」～新舞子西浜で

日時：8月22日(土) 10:00～17:00

場所： 集合 たつの市御津町黒崎 新舞子西浜 民宿カトレア

講師： 和田太一さん (大阪自然観察指導員)

参加費：500円 (親子1,000円) 申込期限：8月16日

主催・連絡先 播磨灘を守る会 (Tel079-322-0224)

●海岸生物調査実施について 環瀬戸内海会議

今年も海岸生物調査を行います。9年目になります。トラストニュース45号に昨年の調査実績や今年の調査票が入っています。調査をやっているといろいろ見えてきます。子どもたちの参加は心強く思います。ぜひご協力をお願いします。各地での調査日程が決まりましたら、生物調査担当：小西良平さん、もしくは事務局までご連絡をお願いします。随時、お知らせしていきたいと思えます。重ねてご協力をお願いします。

今後の生物調査予定

8月 1日(土) 岡や科研瀬戸内市ハクセンシオマネキ観察会

2日(日) 香川県観音寺市3地点(齋藤さんと)

8日(土) 愛媛県中島町(ゆうき生協)

9日(日) 愛媛県 松山市、西条

【九州】

●日本湿地ネットワーク(JAWAN)2009年度総会

基調講演「故山下弘文氏と歩いた諫早湾の美しい泥干潟」講師 佐藤正典氏

日時：9月5日(土) 12:30～16:30 総会&シンポジウム

会場：諫早市「高城会館」1階会議室

17：00 懇親会 諫早観光ホテル道具屋 参加費：3,800円

申込 minatounsou@wine.pjlala.ne.jp 山内

6日(日) 8：30～13：00 干拓地内見学(バス) 参加費 1,000円

申込 事務局 048-845-7177 伊藤

【沖縄】

●市民による海草調査 沖縄ジャングサウォッチ2009 <9月調査>

□9月5日(土) 名護市嘉陽の海草調査

11：00 嘉陽・松浜荘駐車場に集合、16：00 終了予定。

【内容】 砂浜からシュノーケリングで海に入り、水深1～2mの場所でラインを引きながら海草調査を行います。初めてご参加いただく方には、現地で初心者講習(海草の見分け方と調査方法のレクチャー)を行います。昼食は各自で済ませてお越しく下さい。

□9月6日(日) 名護市辺野古の海草調査

11：00 汀間漁港に集合、17：00 終了予定。

【内容】 2隻の船で汀間から辺野古の調査海域に移動し、水深1～3m程度の場所でシュノーケリングによる海草調査を行います。昼食は各自で済ませてお越しく下さい。

宿泊：調査期間中の宿泊を希望される方はお知らせ下さい。素泊まり1泊3,000円(実費)です。食事は付近の食堂・売店を利用します。

■ 申し込み・問い合わせ先 ■

シーグラスウォッチ・ジャパン 河内直子 〒088-1114 北海道厚岸郡厚岸町湾月1丁目47

電話：0153-52-0256 (FAX 兼) 携帯：090-4622-3802 メール：nkouchi@seagrasswatchjapan.com

□ 沖縄での問合せ：鹿谷麻夕 901-0603 沖縄県南城市玉城字百名1147-502

電話：098-948-1417 (FAX 兼) 携帯：090-6862-5219 メールアドレス：shika@tedako.net

4. 海の生き物とその環境に関する出版物の紹介

●林裕美子『宮崎の海岸』9号 (PDF 885KB)

<http://kaigan.cocolog-nifty.com/blog/files/9.pdf>

宮崎県で砂浜海岸の保全や海岸土木工事のありようについて一人で活動を続けている著者が定期的に発行している海岸情報誌。海岸問題についての市民と行政の対話を進める活動をしています。今年の2月に「宮崎の海岸シンポジウム」を開催し、その時に参加者に配布した資料を『宮崎の海岸』8号として発行している(購読料1000円)。しかしPdfファイルでもダウンロードして購読できるようにしている。

次号『宮崎の海岸10号』のテーマは、海岸林の予定。

林裕美子『宮崎の海岸 8号』「宮崎の砂浜はとりもどせるか」(PDF 941KB)

<http://kaigan.cocolog-nifty.com/blog/files/090131.pdf>

また、上記の「対話の活動」の記録をブログにしている。大淀川から一ツ瀬川にかけての海岸問題についての記事が中心。

「ひむかの砂浜復元ネットワーク」ブログ <http://kaigan.cocolog-nifty.com/blog/>

5. 連載エッセイ(10)

自分さがしの自然観察—私たちはなぜ生きている?—
横濱康継(南三陸町自然環境活用センター長)

第三章 生まれたから生きている

鉄腕アトムを産む権利

我が子を失うという悲しみを味わった人物は漫画の世界にも登場する。手塚治虫作「鉄腕アトム」の中で、天馬博士は失った愛息そっくりのロボットを制作するが、成長しないことに腹を立て、ロボット商人に売ってしまう。そしてサーカスで怪力を発揮しているこの少年ロボットを、お茶の水博士が発見して保護者になる。このアトムという名のロボットは、二〇〇三年四月七日に誕生したことになるが、奇しくもこの出来事は本書の執筆と時が重なる。実際にこれが現時点の話であれば、天馬博士は愛息の細胞を保存してクローンを作ろうと思っただろう。つまり鉄腕アトムはクローン人間になったかもしれないのだが、もし私が漫画の世界へ飛んでゆけるものなら、博士にそれを断念するよう説得するだろう。

ある人の体細胞からDNAのかたまりである核を取り出し、別の人の卵の核と入れ替えて、その卵を子宮に戻すと、核の提供者と全く同じ遺伝子を持ったクローン人間が生まれることになる。実際には世界中のどの国でも、クローン人間を誕生させることは容認されていないようだが、一九九六年にはクローン羊やクローン牛が誕生しているので、どこかの国で許されれば、クローン人間誕生は時間の問題となる。真偽は不明だが、二〇〇三年の年明け早々に、ある国でクローン人間が誕生したというニュースが流れた。もはや一刻

の猶予もないのである。

鉄腕アトムは、百万馬力という大変な腕力を持っているが、ヒトと同じ心の持主でもあるという。どんなにマイクロで高性能の電子部品を組み合わせても、ヒトと同じように喜び悲しみそして共感するような心を持ったロボットは永遠に完成しないだろう。しかし仮に鉄腕アトムがこの世に誕生したとすれば、本物の人間の誰よりもはるかに深刻に苦悩したあげく、自殺(?)してしまうかもしれない。

半世紀ほども昔に出版された原作の中でアトムがどのように行動したかは、ほとんど記憶にないが、ヒトと同じ心を持っているなら、少年である彼は、出会った少女の一人に恋心を抱くことになるだろう。しかしロボットの身では、熱烈に愛した少女と結婚することもできない。お茶の水博士達は、アトムを不本意ながら苦しめ続けていることになる。クローン人間は完全なヒトの遺伝子を持った人間なので、私達と同じように恋愛や結婚もできるだろうが、自分がある人物のクローンとして不自然な形で産み出されたと知った時、どのように思うだろうか。少なくとも私はクローン人間として生まれたくない。

男女の出会いによって自然に子が生まれた場合なら、子という被害者に対する加害者は両親なのだが、クローン人間として生まれた子に対する加害者は、クローン技術者なのか核の提供者なのか、あいまいになってしまう。結婚して自然な形で子を産んだ両親は、「愛という名の鉄格子」の中で必死な子育てを始めるのだが、クローン技術者はもちろんのこと、核の提供者さえ、「愛という名の鉄格子」の中へ入ることはないだろう。

核の入れ替えられた卵を子宮内で育てる役割を果たした「代理母」は、妊娠と出産によって生じた愛情に促されて、「愛という名の鉄格子」に入ろうとするだろうが、肝腎の子は連れ去られてしまうので、深刻な人権問題を生むことにもなる。「代理母」は、生まれる子が遺伝的には自分の子ではないことを承知したうえで、その役割を果たす契約を結んだはずなので、子を連れ去られるのもやむをえないと言えるが、子のほうは「代理母」を本当の母としか思わない。ふつうの結婚で生まれた子でさえ「被害者」なのだから、クローン人間として「代理母」から生まれた子は、あまりにも哀れな被害者となる。そのうえクローン動物は重大な欠陥の持ち主になる可能性があることも明らかになりつつある。

世界初のクローン動物として誕生したドリーという名の羊は、重い進行性肺疾患のために、二〇〇三年二月に安楽死させられた。羊としては寿命の約半分にあたる六歳だったという。そしてすでにかなり以前から老年性の関節炎も患っていたとのことである。ドリーは、その一生をかけて、クローン人間の運命を予告してくれたのである。

クローン人間も人格を持つということを忘れてはならない。クローン人間を産むということは、悲惨な運命の約束された人物を「本人の了解なしに」産むということを意味するのである。それならとばかりに、人格を持たないクローン人間を作ろうという恐ろしい試みが登場しそうだが、それこそがクローン技術の最終目標であるような気もする。

自分と同じ核を持ったクローン人間からは、拒絶反応の全くない臓器の提供を受けることができる。つまりクローン人間は、スペア臓器の倉庫としての役割を果たすことになる

が、倉庫に人格があつては具合が悪い。若くして臓器移植が必要になった人のためには、拒絶反応のない移植技術の開発は望まれるが、「スペア臓器の倉庫」は、むしろ長生きしたい金持ちの老人達に歓迎されそうである。もし今の世に秦の始皇帝が生きていたら、巨額の費用をクローン技術者に支払い、何人もの「スペア臓器倉庫」を作らせたことだろう。

スペア臓器製造業は巨大産業に成長するとも予測されるが、そのおもな需要は富裕な高齢者からのものになるだろう。これまで権力者や富豪にも夢でしかなかった不老長寿も叶う時代が近づきつつあるというわけだが、それは金で命を買える時代の到来を意味する。どんな金持ちにも、延命のためにクローン人間を産むことなど許されてはならない。

鉄腕アトムはもとより、クローン人間も幸いにしてまだ実在しないが、本人の了解なしに産み出されてしまうという点では、生物はすべて彼等と同じであり、ヒトもその例外ではない。つまり子は親も環境も全く選べないまま生まれてしまうのである。私達が時として自分が自分であることに不満を感じたりするのも、そのためと言えそうだが、内戦や飢餓あるいは貧困で苦しまねばならない境遇にある人達の嘆きは、不満などという言葉で表せる限度をはるかに超えている。

了解なしに産み出されたことに対して、不満を抱いたり嘆いたりするという、複雑な脳のはたらきを持つ生物はヒトだけである。子を産むということは、そのような存在を新たに産み出すことであるということを、私達は認識しなければならない。

「生かされている」から「生きる」へ

生物は生きているという性質を持っているから生きている。ヒトもその例外ではないのだが、脳が高度に発達したために、「なぜ自分は生きているのだろう」と考えるようになってしまったヒトという生物は、「生物として生まれたから生きている」という答だけでは物足りず、「何かの使命のために生きている」と思いたくってしまうようである。「何となく」とか「死ぬのが怖いから」あるいは「何も思わずに」生きているという人もまれではないだろうが、誰でも思春期の頃には「私は何のために生きているのだろう」と思ったはずである。

ヒトも幼いうちは好奇心が非常に旺盛なため、いろいろな不思議に気をとられ、それらを観察したり、収集したり、謎を解こうとしたりして日常を送る。しかし成長するにしたがって、自分自身が最も不思議な存在であるということに気づく。その頃が思春期にあたるのだろうが、ほぼ同時に芽生える恋という心の動きのほうが強くなるらしく、異性を求めることに熱中して、「なぜ自分は生きているのか」などという疑問は忘れてしまう。やがて結婚して子が生まれると、「愛という名の鉄格子」の中での懲役に服してしまい、謎解きなどしている余裕は全くなくなってしまう。

母親ほどには育児に関わらない父親も、仕事は子のためにしているはずなので、行きたくない会社へ行って働くのも「愛という名の鉄格子」の中での強制労働にあたり、「家族のために家を建てたい」と頑張るのもこれに該当する。そして定年を迎える頃に子供達は巢

立つ。つまり定年とほぼ同時に私達は「愛という名の鉄格子」で囲まれた刑務所から釈放されるのである。

定年を迎え、会社勤めのような忙しい仕事から開放された時、「これまで自分は何をしてきたのか」という気持になったりするが、思春期に感じそして忘れてしまった自分に対する謎が少し形を変えて甦ったとも言えるだろう。

答のひとつは「忙しい毎日をひたすら生きてきた」というようなものだろうが、私の経験からすれば、「生きてきた」ではなく「生かされてきた」のほうが、より正しいような気がする。なぜなら「死んだら子供達が路頭に迷う」と思い続けてきたからである。つまり子供のために生きているしかなかった私達は、親ツバメ達と同じように「生かされてきた」のである。

思春期に自分という存在の謎を解き明かそうと思ひ、大学の生物学科へ進んだつもり私だったが、やはり恋の力に負けて結婚した。そのために子が生まれてからしばらくは謎解きもほとんど停止状態だったが、子供達がやや成長して、海辺での生物の研究に熱中し、考える暇にも恵まれるようにもなり、逆に我が子の存在も自分を知る手がかりとして利用できるようになった。しかしそれでも「愛という名の鉄格子」から抜け出すことはできず、かえってその鉄格子の堅牢さを一層認識させられることになった。

定年を迎えた時の私は、子供のために生きていなければならないという立場から抜け出していたが、大学を離れた瞬間に私の頭を占めたのは、「これからの人生は全く自分一人のものだ」という思いだった。これには、「生きている状態の維持」を強制する力が消えたので、自分の意志で生と死のどちらを選んでもよい、という意味も含まれている。

親の愛情に包まれながら食欲を満たし、不思議発見と謎解きをして過ごす。これはヒトを含むすべての哺乳類の子供の日常であり、鳥類のヒナでもみられるとも言えそうだが、ヒトの子供達だけは、好奇心の発露としての不思議発見や謎解きのほかに、似て非なる立身出世のための学習とやらを強いられる。それはともかくとして、ヒトでも、他の動物の子と同じようにして過ごす子供時代は、「生物だから生きている」がそのままあてはまる。そして思春期に入って、自分自身に不思議を発見してしまうところだけは、ヒトという動物に特有な現象と言えるが、子育てというその後の人生は、親ツバメ達と同じように「愛という名の鉄格子」の中で過ごすのである。

子育てはやがて終わるが、このあたりから「余生」という人生最後の部分が始まる。一般に動物ばかりではなく、植物も子育てあるいはその短縮型とも言える産卵を終えたり、生殖機能を失ったりすると、その一生を終える。種子植物は子育てではなく「孫育て」なのだが、イネなども、孫にあたる胚が、モミの中で娘（胚の母）の変身である胚乳に抱かれて、きまった段階まで育つと、枯死して田は一面の黄金色に染まる。ヒトは、子育てを終えてもすぐには一生を終えず、その後もかなり長いあいだ生きているという特徴を持つ生物である。この傾向は程度の差はあるものの、哺乳類のかなりの種類で見られ、ヒトに近い種類になるほど著しくなるようである。

サルや類人猿などではよく調べられているのだろうが、自分の子の子育てを終えてからも、群れの中で何らかの役割を果たしているのであれば、群れ全体の共同の子育てに参加していることになる。そして共同の子育てにも役立たなくなるほど年老いたチンパンジーやゴリラがどうなるか、大変気になるところだが、このあたりは霊長類学の領域である。

ヒトの群れつまり私達の社会では、自分の子育てを終えてからも、職業に就き税金を払ってれば、共同の子育てに参加していることになり、同じ意味で、子を持たない職業人もその妻も共同の子育てに参加していると言える。定年とは、職を離れることなので、共同の子育てからも離脱することを意味する。チンパンジーやゴリラなどでは、その「離脱」の時期は個々の老化による体力の衰えの程度で自然に決まるはずだが、私達の社会では、その時期を六〇歳とか六五歳というように、個々の企業や自治体あるいは官庁で決めている。つまり個人個人の体力の衰えの程度は問わず、一律にその年齢で「無罪放免」となり、あとは自由つまり生きていてもよいし死んでもよいということになる。

私自身の全く勝手と思われそうな気持ちを敢えて披露すると、「全く自由になったのなら死を選ぶ」となる。毎日世界のどこかで戦争や紛争あるいは飢えのために多くの人が死に、世界中で最も安全なはずの我が国でも、無邪気な子供まで巻き込んだ悲惨な事件が絶えない。国内ばかりでなく世界中の出来事も迅速に知ることができるようになったために、私達は世界中の悲しみに共感しなければならなくなってしまった。異性への愛や子への愛に夢中になっている「収監」の状態にある時は、それほどでもないのだが、「釈放」されてからの心は、共感によって大きく占められるようになるらしく、知りうる限りの世界中の悲しい事件に、耐えきれないほどの痛みを感じてしまう。

世界中の悲しみに共感する心を持ちながら生きているには、あまりにも今の世界は多くの悲しみを産み続けている。それに耐えられなければ死を選ぶしかない。私も忍耐の限界にあるので、死を選ぶ理由は立派に存在することになるが、やはり「生きているという性質を持った生物」としては、そう簡単に死ぬるわけではない。自分の意志とは関係なく、呼吸という作用も心臓の鼓動も絶え間なくくり返され、酸素と栄養を含んだ血液が体中の細胞に送られ、また空腹になれば食欲が湧く。そして上から何か落ちてくれば反射的に避けてしまう。体の機能はすべて生きている状態を維持するように働いているのであり、自殺を思い立って体を傷つけた時に痛いと感じるのも、意志とは関係なく神経が死を避けるように働いているためである。

体中の全機能が死に対して抵抗しているわけだが、それにも増して家族などの非常に強い抵抗が予想され、そして私の死で家族は深く悲しむだろう。悲しみを逃れるための死が新たな悲しみを生んでしまうのであり、私としても愛する者達に余計な悲しみを与えたくない。空海のような聖人でなければ、周囲から認知された形で死を選ぶことは無理なのだろう。

生死選択の自由を得ても、実際に死を選ぶのは極めて困難なのだが、「愛という名の鉄格子」の外で生かされているのも耐え難い。生を選ぶほかないとすれば、辛さの原因になる

「世界中の悲しみ」を少しでも減らすように行動する道しか残されていない。自由になった身がこのように目標を持った瞬間から、「生かされている」だけの余生は、積極的に「生きる」余生に変わるのである。

ユズリハのように

「愛という名の鉄格子」の中から釈放され自由の身になった人物が、悲しみと苦しみに満ちたこの世からも脱出したいと願うのは、むしろ当然だろう。実際に死を選ぶのは非常に困難なのだが、少なくとも自然な死が訪れた時には、抵抗なくそれに従うことになるはずである。しかし「釈放」されたあとも、自然の死の訪れに抵抗し、クローン技術で生産された臓器を買ってまでも生き長らえようとする人物も存在するようだ。そのような人物の心は、世界中に満ちあふれている悲しみや苦しみに共感することがないのだろうか。

「釈放」前の人達に死が訪れた時、必死に抵抗するのは我が子のためであり、そのような場合には、最先端の医療技術も存分に駆使すべきである。同じ医療技術でも、「釈放」前の人と「釈放」後の人とで施す意味が全く異なるということを、私達は明確に認識しなければならない。巨額の金を積めば不老長寿を買えることになるような時代を目前にして、「余生とは」と問い直す必要がある。

世界中の悲しみを少しでも減らすように生きたいと私個人は思っているが、多様な余生があってもよいだろう。しかし少なくとも若い人達のエネルギーを吸い取ってしまうような余生を私は送りたいくない。介護問題などの聖域に踏み込まないよう、具体的な話題は避けるが、自然界には、私達の判断に指針を与えてくれる生物や現象が多く存在する。そのよい例は植物の葉の新旧交代である。

草や木は多数の葉を付けているが、茎や枝の先の生長点という部位で新しい葉は芽生えるので、根元のほうに付いている葉ほど老化している。茎や枝が先端で次々と新しい葉を芽生えさせながら延びてゆくと、それに合わせるように、根元のほうから次々と古い葉が枯れてゆくが、落葉前の古い葉からは、その成分が生長点のほうへ送られ、新しい葉の栄養になる。

常緑樹では、春になって新しい葉がいつせいに開くと、やがて前年の春に開いた古い葉は枯れ落ちるが、やはり古い葉の成分は新しい葉へゆずり渡される。ユズリハという種類では、新しい葉が開くと、古い葉はいつせいに垂れ下がり、やがて枯れ落ちるため、古来この様子が親から子へ身をゆずる姿としてとらえられてきたようである。古い葉から糖やアミノ酸が生長点へ送られ新しい葉の栄養になる、などという生理現象も明らかにされてなかった頃から、すでにこの植物に「ユズリハ」という名を与えていた先祖達は、そのことの本質を悟り、いさぎよい新旧交代の合理性を理解していたのだろう。

平安時代には亡き人への供物の下にユズリハを敷いていたという。先祖達はこの樹木の葉に自分達を見ていたのであり、古い世代は若い世代に大切なものをゆずってゆかねばないという教えを込めて、そのような風習を残したに違いない。私達の社会も一本の植物体

のようなものである。古い葉から栄養をゆずられた新しい葉は、速やかに生長して盛んに光合成を営めるようになる。しかしその逆に新しい葉から古い葉へ栄養が送られるようなことになったら、新しい葉が光合成を営んで生産した栄養をどんどん吸収した古い葉が、肥大したまま落葉するようになり、そのため生長しにくくなった植物体は、種子を実らせることもできずに、やがて枯れてしまうだろう。

私のような老人はユズリハの古い葉のようであらねばならないと言っても、体の成分を若い世代にゆずるなどという芸当は不可能だし、できたとしても無意味である。成分を財産に読み替えると、大分それらしくなって、遺産相続のことかなどと納得されかねないが、やはり違う。

「古い葉が体の成分を若い葉にゆずる」を「老人が自分の余生を子孫達に捧げる」と読み替えるのが、最も素直と言えそうである。世界中の悲しみを少しでも減らすことに余生を費やそうという私の企ても、余生を子孫に捧げるひとつの形と言える。そして「釈放」された老人の強みは、命がけで行動できることである。我が子の子育ても群れ全体の子育ても終えた身であれば、何の未練もなく命を捨てることができるからである。

「命を賭けて余生を子孫達に捧げる」となれば、ますます「ユズリハ」らしくなるが、これは余生に入ってもなお、遠い未来までを視野に入れた地球規模の壮大な「愛という名の鉄格子」の中に私達は居る、ということの意味しないだろうか。(次号につづく)

6. 事務局便り：

- 企画案などその他なんでも本会の活動に関することは、事務局あてにお寄せください。
- このメールマガジンは、毎月1日と16日の2回発行の予定ですが、都合によって遅延や中止もあります。配信を希望する方、送りたい方がありましたらアドレスをお知らせください。また、パソコンを使えない環境の方には印刷体でもお届けします。その場合は、郵送料をご負担していただくことがあります。
- このメールマガジンは転載自由です。海の生き物に関心を持っている方に広く読んでいただくために転送をお願いします。ただし写真を別の目的で使用する場合は事前にご連絡ください。海の生き物や守る運動についての情報など、また各地で行われている海の生物の観察会、研修会、その他の行事に関する情報もお寄せください。「うみひるも」のバックナンバーは、ホームページからダウンロードできます。
- 本会は自然観察会や講演会を各地で実施しています。各地で開催を希望される方、開催をお手伝いできる方は、ご一報ください。また、各地の団体との共催も行います。ごいっしょに講演会や観察会をしたいと思われる団体からも提案をお受けします。
- 本会へのカンパをお寄せください。銀行口座は「ゆうちょ銀行 口座番号：10610-6673021 海の生き物を守る会」へ。

7. 編集後記

早くも夏真っ盛りの 8 月になりました。みなさまは海を楽しんでいるでしょうか。海に行ったらぜひ海の生き物を探し、海の生き物の写真を撮ってお送りください。このメールマガジンの巻頭の「今月の海の生き物」で紹介します。写真の腕自慢の方は、ぜひとも試してください。なお、被写体の生き物の名前が分かるもののみを受け付けています。名前も同時に調べてください。(宏)

8. 「うみひろも」と「海の生き物を守る会」について

この「うみひろも」は「海の生き物を守る会」のメールマガジンです。配信が迷惑と思われる方は事務局までご連絡ください。

海の生き物を守るためになにかしたい！というあなたに！

会員募集中です！

会員は本会の趣旨に賛同できる個人・団体とします。会費は個人 2,000 円/年、団体 20,000 円/年。匿名による参加も可能です。会員は、当会の名前を使って各地で海の生物とその環境を保護・保全する活動を行うことができ、そのための助成金申請をすることができます。活動は当会の発行するメールマガジンなどを通して広く通知されます。入会希望の方は、事務局 hiromuk@mtf.biglobe.ne.jp (向井) まで、氏名、住所、メールアドレスをお知らせください。

事務局員も募集中！

事務局を手伝っていただける人を探しています。パソコンでメールが使える環境にあれば近くにいなくてもお手伝いいただけます。ただし、無収入ですので海の生き物の保全・保護に関心とボランティア精神のある方。

メールマガジン『うみひろも』第 44 号 2009 年 8 月 1 日発行

発行&編集人「海の生き物を守る会」代表 向井 宏

〒606-8244 京都市左京区北白川東平井町 23-1 グリーンヒル北白川 23

TEL&FAX:075-703-7205; 090-8563-1501

メールアドレス：hiromuk@mtf.biglobe.ne.jp

ホームページ URL：<http://www7b.biglobe.ne.jp/~hiromuk/index.html>

銀行口座：ゆうちょ銀行 口座番号：10610-6673021 海の生き物を守る会

